

氏名	大崎 晴地
ヨミガナ	オサキ ハルチ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第425号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 美学的スキゾフレニアと生成するシステム 〈作品〉 AIR TUNNEL

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木幡 和枝
（論文第1副査）	東洋大学	教授	（文学部）	河本 英夫
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	八谷 和彦
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小谷 元彦
（副査）	東京福祉大学	教授	（社会福祉学部）	花村 誠一

（論文内容の要旨）

ミシェル・フーコーによれば15世紀以来、芸術の想像力には狂気を昇華するような文化があり、ボッシュやブリューゲルなどの絵画をとおして、妄想状態や夢幻状態における現実世界の悲劇的な「狂気」が描かれてきた。それは狂気が一般化、普遍化される以前のものであり、未だ生と死という二項対立として捉えられる以前の、「死」のみの世界がある。かつて「死」は人間の痴愚（狂気）とされてきたが、文芸や芸術の世界における画像の根本的な転換をとおして表象されてきたのである。ところが18世紀のフランス革命後の社会再編にともない、狂人は監獄に隔離され、狂気（病気）が理性のもとで制度的に配置されることになった。この時期にフーコーの記述には最初の分裂病が見られるが、本論では精神病理から発達障害までを範囲に、経験の変容と再組織化にともなう個体化の現実（自然）を踏まえ、芸術をとおして見えてくる現代の病理とその個体的環境について問う。

第一章では、言語と知覚による「指示」の働きを考察する。そこで精神病のカプグラ症（同一性否認）やオレオレ詐欺に見られる自己指示語など、「指示」に含まれる知覚の確からしさ（強度）を取り上げる。個体を特定する固有名、あるいは指示の強度（このもの性）の哲学、文学を踏まえた上で、脳神経系の感情回路が指示を保証していることを見るが、強度性を問題にする以上は還元論的な視点には矛盾がある。経験の「このもの」や「その人」といった指示語が示す確からしさに迫るため、「何」ではなく「どこ」または「どのように」という経験に注目し、固有名とのギャップを明らかにする。

マルセル・デュシャンの「三つの停止原器」では、一メートルの長さの紐が一メートルの高さから落下することにより、偶然にできた形が宙づりとなって「停止」している。こうした「世界の裂け目」が示唆しているのは、「メートル」の最短距離が一つには決まらないということであり、世界は停止できず、絶えず個体化しつづけるプロセスであるということだ。現にメートルの単位は個物から光の速度に変わったことで、より頑健な（変わることのできない）測度を確立したともいえるが、本論では事実上の個体化に焦点を当て、イメージのネットワークを設定した上で指示語を再考する。こうした別の強度に、「単純な精神病」と「複雑な精神病」の萌芽を仮定し、次章の導入とする。

第二章では、統合失調症のダイアグラムをもとに、芸術作品に含まれる狂気を現象学的に記述する。それは臨床的な鑑別診断というよりも、芸術作品をとおして精神病理学にアプローチする病跡学的視点を提示するものであり、その作家の潜在的な病的資質を探ることを試みる。これを「美学的スキゾフレニア」と名付

けた。現代の作品には、ある種の解離的な病理を含んだ狂気が見られるが、主に強度の喪失に関わる離人症は、観察者の逆説的な「痛み」を照射する上で示唆的である。解離しながら迫真的でもある画家のフランス・ベーコンと、映画監督のデイヴィッド・リンチの作品を中心にして、現代において単純さと複雑さが重層する精神病のありようを見ていく。

ベーコンの一九五〇年代に見られる<教皇>シリーズをはじめとした、縦縞のノイズのある筆触の作品群では、図版や写真、または映画などのイメージ・ソース（映像的写し）を引用したことで「ポップアートの源流」（東野芳明）とも目されたが、キャンバスの上に描かれたイメージを掻き消すような所作により、人物の触覚性のなさ、現実感のなさが強調されている。一九六〇年代になると所謂ベーコンの作品に特徴的な、顔を歪ませる描き方への変化が見られ、内臓が裏返ったかのような凶像が見られる。こうした作風の変遷に、触覚性の喪失した離人神経症から、世界が裏返ったかのような離人症（精神病）の世界への移行を読み取ることができるだろう。

またリンチの作品では、観察者の視点が内に含まれた映画の物語システムによって、人物の不透明な身体が解離したり変貌したりする妄想状態を捉えている。音と映像の解離に幻聴や思考伝播などを見ることも可能だ。単純な現実と妄想（夢）という構図では捉えられず、物語がメビウス状に展開されることにより、当人にとっての世界や感覚に接近している。ここでは人物誤認、逆同一化、常同症をキーワードに分析する。

第三章では、個体の再組織化を踏まえて、より実践的なリハビリテーションの臨床に傾注していく。ここでは欠けたものを付け足して正常な状態に戻すことではなく、新たに個体を再組織化する、という意味でのリハビリを設定する。

死を意味として設定した人類は、生と死の二項対立を「知る」ことにより、可能性の幅を縮減してしまう。自分の死を経験することはできないという意味での逆説的な不死ではなく、絶対的な生のもとで死ぬことができない身体を宣言した荒川修作の作品を通じて、知覚そのものの形成について考察する。死はここに来て、個体的な記憶そのものの自己収束といった意味合いを帯び、逆に生は再組織化にともない常にみずからを更新しつづけることである。

発達障害である脳性麻痺のリハビリテーションでは、行為することにもなう調整の働きや自分であることの感じさえ喪失した子供に向き合うセラピストの眼差しがある。社会システムにとっての構成素が人間ではなくコミュニケーションを単位とするように、リハビリテーションでの関係もカップリングから生まれ、他人との間で起きる経験に重点が置かれる。こうした場面で光、空気、重力のような触覚性空間について吟味し、意識が場を占める働きを通じて個体にとっての現実を問い直す。環境は個体と不可分離であり、そのような先験的な働きを喪失し、感覚が過度に過敏になることで、個体はみずからにとっての選択性を失った閉域に向かう。個体の境界が内とも外とも言えないように、生そのものと死そのもののどちらとも言えないような個体化があり、まさに個体は個体化をつうじて、みずからの生を組織化する。そうした生の可塑性を深化させるための意味を考察にすることになる。

（博士論文審査結果の要旨）

大崎晴地氏の論文は、以下の諸点にかかわっている。

1) 哲学的な考察を一方での軸としながら、芸術的制作用がどこで成立し、またそこでの制作用がどのような内容を持ちうるのか、さらにはその場合の制作用が人間の経験の形成にとって、どのように寄与しうるのかを論じている。世界の中には、いくつもの裂け目がある。たとえば個体は、みずから自身のみずからを形成する存在であるが、個体そのものとその属性の間には埋めることのできないギャップがある。どのような詳細に属性を調べ上げても、個体そのものには到達することはできない。個体そのものと属性の間には、次元の違いがあり、しかも異なる次元にあるものをまるで統合しているかのように個体は成立している。するとその裂け目を別様に活用したり、別様に統合形態を形成するような試みが成り立つことになる。メートル原器と個々

の物体の距離との間にも、類似した裂け目があり、デュシャンのメートル原器は、原器の設定そのものに任意性があることを活用し、偶然落下した紐であっても原器になりうるという構想から生まれている。

世界の裂け目を別様に生きることは、スキゾフレニアの基本的な傾向であり、そうした作品形成のプロセスを実行するものを、美学的スキゾフレニアと呼んでいる。病理的なスキゾフレニアとは異なり、スキゾフレニアの類似体が、芸術的制作に多くの制作回路をあたえてくれることを明らかにしようとしている。

2) 個々の作品分析にあたっては、とりわけ狂気類縁的な作者を取り上げ、作品と狂気の内実を関連づける考察を行っている。これは一般的には、「病跡学」pathographyのテーマである。ここでは統合失調症のダイアグラムを活用し、妄想様変容としてカフカ、デヴィット・リンチ、離人性変容としてフランシス・ベーコン、夢幻性変容としてゴッホ、緊張性変容としてベケットを取り上げ、病跡学的な行っている。このなかでもとりわけ、フランシス・ベーコンについては、作風の時代的な変化をベーコンの病態の変化と関連づけて論じることができており、作品論を作品の技法からではなく、作品のもつ印象批評からでもなく、生成するシステムの一つの内的な現れとして捉えることに成功している。これは従来のベーコン論(倒錯性愛)とは異なるベーコン像を提示できている点で、大きな収穫である。

ただし狂気の種類を、単純な狂気と複雑な狂気に区分して、複雑な狂気が芸術的制作につながるとしている点は、さらに立ち入って考察すべき課題となっている。

3) 生成するシステムという点では、経験そのものや身体動作の形成が、そのまま作品と連動するような仕組みの考察が必要となる。荒川修作の後期の作品は、見て鑑賞するようなものではない。奈義の龍安寺に典型的なように、作品の内部で作品を捉えようとするれば、身体や感覚まで形成されてしまう。つまり作品そのものへのかわりが、経験の形成にまで及んでしまうような作品があり、たとえばゴッホの黄色を見ることは、同時に見ることそのものや光への感度を形成することをともなっている。こういう場面では、作品が感覚や身体そのものの形成にかかわる以上、人間再生を課題とするリハビリテーションの課題と内的につながってくる。その意味で、経験の形成(システムの生成)を課題とするような作品を取り上げて、そこに組み込まれた仕組みを考察しようとしている。これは芸術作品の新たなカテゴリーを設定するような課題であり、従来ではいまだ明確に議論できないできたカテゴリーを明示化する試みになっともいる。

この作業は、作品Air Tunnel に内的に引きつけられることになる。この作品は、作品への体験的かわりが動作や身体や触覚性感覚を形成しうるように構想されており、治療用のツールとしても活用できるように作られている。

以上の点で、大崎晴地氏の「美学的スキゾフレニアと生成するシステム」は、意欲的な課題設定と人間の経験の可能性を拡張しようとする試みであり、課題の大きさと視野の広さを備え、個々の論点でも従来の議論を超えていくいくつもの指摘を含んでいる。十分に評価できる論文である。

(作品審査結果の要旨)

大崎晴地は、学部時代から一貫して、人間の知覚のありかたや、脳機能障害を受けた患者の認識の欠如に興味を持ち、それを応用した作品の制作をおこなってきた。

今回の昨日、AIR TUNNELは、そうした彼の興味の延長にあるものであり、作品は13mX13mの4層の布の端を閉じたものである。各層の布地は軽く、さまざまな色の生地を縫い合わせたもので構成されている。作品には人間が入り込めるようになっており、各層には他の層に移動できる穴が空けられており、この穴を通過して、別の層に移動することが出来る。

この作品は複数の体験者が入ることが想定されているが、内部に誰もいない場合、各層がぺちゃんこになってしまい、出入口がわからない、という問題も発生するため、それを緩和するために各層にはエアサーキュレーターが置いてあり、柔らかく膨らむ布は、中に入ることや入り口を探すことを体験者に誘導する。

大崎はこのAIR TUNNELの「布を隔てて他人とコミュニケーション出来る構造」が、発達障害児の発育や教育に役に立つ可能性がある、と考えており、その可能性を探るため、広島・三原市の保育所、児童発達支援デイサービス、小学校の特別支援学級などに小型の作品を持ち込み、そこで実際に児童に体験してもらい、施設で関わっている保育士や作業療法士、職員へのヒアリングを行っている。

これはもちろん、医療行為とは異なる性質のものであり、少例のサンプルですぐに「ADHDへの機能的効果がある」とは認められにくいですが、職員や作業療法士の作品に対するコメントはおおむね好意的であり、「アートによる、発達障害児のQOLの向上」について、今後の可能性を大いに期待させるものであった。このような観点から、作品を博士号に値すると認定する。

(総合審査結果の要旨)

著者 大崎晴地の博士研究論文の出発点には、人の個体の環境（能力、生体としての障害、欠如、病理、など）を前提とした上での「個体内のautopoiesis（生命の有機構成内における自己創出／自己産出）」への関心がある。マトゥラーナとヴェレラが提唱した意味での自律的特性を重視した関心であり、所与の基準に合致させる学び／教育ではなく、有機的な自己学習／援助、それへの関心とも言える。その研究結果にふさわしい一表現として、博士作品「Air Tunnel」が制作されている。

幼児から成人にいたる年齢層で何らかの精神疾患をもつ患者の臨床場面において、この「作品」が治療に結びつく活動の一環として活用されることを著者は期待しており、研究過程でも臨床医や治療者との共同作業をとおして研究と作品の改良に努めたが、これはこの種の研究においては不可欠な作業であり、著者がその過程を十全に経たことは専門研究上も道義的にも評価される。

論文においては、美術家の立場から、身体、生命、時間、空間への関心を実際の建築／建造による表現へと昇華させた荒川修作の作業、とくに『死なない生命』というアフォーリズムを浮き彫りにする形で分析している。さらにデイヴィッド・リンチについては固有の作家論／作品論が成就した、と論文副査で、精神科学と芸術の関連を深く探る精神医学者、東京福祉大学の花村誠一教授の評価が高い。

荒川の建築的な創造作業の分析に加えて、論文の軸としては美術、とくに絵画制作と個体の関係性を探り、とくに美学的なスキツォフレニアをはらむ個体の「病跡学」の手法を用い、F・ベーコンなどの実作品を対象に、創造性と病跡、また現象学的な意味での作品の価値を分析している。

論文審査は精神科学／医学、哲学の専門家を擁し、論文第一副査で、我が国における認知行動療法の哲学的な意義を支持する第一人者、東洋大学河本教授は、「従来の議論を超えて行くいくつもの指摘を含んでいる。十分に評価できる論文である」、と高く評価している。また、論文の姿勢と作品との関係についても、臨床場面への貢献度に、下記のように評価と期待が寄せられている。「作品が感覚や身体そのものの形成にかかわる以上、人間再生を課題とするリハビリテーションの課題と内的につながってくる。従来ではいまだ明確に議論できないできたカテゴリーを明示化する試みになってもいる。」

作品第一副査の評価も高く、「発達障害児の発育や教育に役に立つ可能性がある」と、大崎の仮説が説得力ある作品に結実したことを評価している。「アートによる、発達障害児のQOLの向上」について、今後の可能性を大いに期待させるものであり、博士号に値すると認定する。」としている。

論文、作品それぞれの、また、両者の相互補強関係についての総合評価は高く、大崎の美術作家、芸術の社会的貢献の可能性を探る実践者、研究者、提唱者としての一貫性のある真摯な姿勢への評価を含めて、博士号授与に十分に値するものである、との決定を審査会一致して行った。